

## 2008年ろう学生リーダーシップ養成夏季研修に参加して

筑波技術大学 産業技術学部  
総合デザイン学科 視覚デザインコース  
2年 山本侑季

### 研修の目的

リーダーの条件を探る  
先輩ろう者の話を聞く  
社会における交渉術  
ボランティアの必要性  
人間関係作り  
ろう文化を紹介、他国のろう文化を知る  
他国の文化を知る  
学生同士の討論  
体験学習  
各国におけるろうの立場を知る

### 研修内容（日程・場所）

8月10日から16日までの一週間  
イギリス南東部イーストサセックス州  
日本4人、アメリカ6人、ロシア4人、中国4人  
4カ国のろう学生たちが参加

### 志望動機（目標）

自分でお金を貯めて海外旅行の計画を立てることも出来るが、今の自分でしか得ることの出来ない何かがあると思った。様々な国々から集まったろう学生とともに学ぶプログラムであり、実際に訪れる国の文化はもちろん、異国の文化も同時に知ることが出来る。日本と、どれくらい異なるかを実際に感じる事が出来る。なかなか経験出来ることではないと思う。（経験）

手話や身振り、ASLを使って自分の気持ちを伝えたい。伝えたいという気持ちはろう者も聴者もすべての人誰もが持っている。通じ合えない悔しさ、通じ合える喜びを感じた。 (コミュニケーション)

日本文化および日本のろう社会に関する発表を行い、他国の発表を聞くことで日本と異国におけるろう者の立場を比較し改めて見直すことが出来るかもしれないと思った。(再発見)

とにかく若いうちにいろんな経験をし、今の自分を変えたいと思った。(成長)

### 滞在中 (印象に残ったこと)

「紹介ゲーム」でロシア人の男子学生に声を掛けられ、お互い自己紹介をした。

しかし、その人は文字もロシア語、手話もロシア手話。ひとつもわからないことでわたしは泣きなくなった。そしてアメリカ人の学生たちと今まで学んだASLを使って話した。伝わるって素晴らしい。とても感動した。しかし、困ったことがあった。向こうの言っていることがわからない。筆談するが、崩した英語や数字だらけで読みにくい。また泣きなくなった。(8月10日・1日目)

白澤先生の講演を聞いた。リアルタイムでわかるって嬉しい。(8月12日・3日目)

バスに揺られてロンドンへ。日本では考えられないイギリス人の行動に何度もびっくりさせられた。わたしの落し物を拾ったイギリス人はわたしを呼び掛けた。でも気付かないわたしをさらに近くの通行人が教えてくれた。とても感激した。

障害手帳もない。となれば当然電車割引もない。イギリスでは健常者障害者だろうがみんな平等に扱っているようだ。構内放送がなく静かなホームは初めてだった。

歴史あふれる美しいロンドンの街、またいつか訪れたい。(8月13日・4日目)

最後の日。仲良くなったアメリカ人の男子学生に案内され森の奥へ。絵本に出てくるような、日本にはない変わったしわくちな木がたくさん立っていた。おじいちゃんの顔に見えてなんだかおかしかった。そこでたくさん写真を撮った。充実した夕方だった。(8月15日・6日目)

お別れの日。ひとりひとり握手を交わし、しっかり抱きしめた。最初は全くわからなかったASLが半分も読み取れるようになったことでとても喜びを感じた。もっとここにみんなでいたかった。でも、日本へ帰国後やりたいことがたくさんある。やる気と充実感。たくさんのことを学び、とても濃い一週間だった。参加してよかった、と心から思う。(8月16日・7日目)

## 帰国後（目標・これから）

たくさんの人たちと交流し、自分の中の考えがはっきりしてきた。

目標を決めることは大事だが、  
もっと大事なのは目標を達成するために今、やるべきことをこなすことだ。

日本は情報を音で聞いて知ることが多すぎることを知った。

でも、わたしはなぜ補聴器を外すか外さないかで悩んでいたのだろう。聞きたいときは聞けばいい。うるさかったら切ればいい。わたしはわたしでいい。音の無い世界にこだわるのではなく自分の世界を作ればいいのだと思った。ろう者としての誇りを持ち、そしてろう者の中のろう者になりたい。（自分自身）

参加する前は「わたしを支えてくれる人」がいいな、としか思っていなかったけど、研修に参加した何人かの夫婦のやり取りや講演を聞き、「互いに刺激を与え、互いに尊敬し、互いに成長し合えるパートナー」が欲しいと思った。（パートナー）

聴者から見たろう者。聴者の立場に立って考えることも必要だと思った。ろう、聴者など多くの人と交流することで視野を広げ、異国の手話に刺激を受けたわたしはASLをさらに覚え、国を超えた交流をしたい。

そして手話が聴覚障害者の第一言語に留まらず、手話が公用語のひとつとなり、聴覚障害者と健聴者が共に共存の出来る社会になればいいな、と思う。